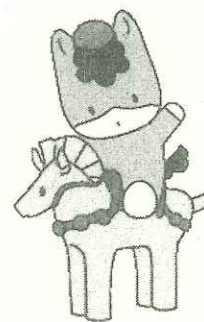


東国文化自由研究レポート



研究テーマ

築瀬二子塚古墳の

石室の二つの謎についてせまる

～ 赤く塗られた玄室の謎・横穴式石室の謎～

提出日 2021年8月27日(金)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 2組 3番

氏名 市川 湧貴

1.調べようと思った動機・目的

東日本最大の古墳大国群馬では、1万基以上の古墳が確認されている。群馬県安中市には関東の中で最も古い時期(6世紀初期)に作られた横穴式石室をそなえた「築瀬二子塚古墳」がある。玄室につながる羨道は長く、玄室は赤く塗られている。また、2段構造の前方後円墳で全長約80mで後円部径約50m・高さ約8m、前方部幅約60m・高さ7mとなっている。



【築瀬二子塚古墳上空写真】

そこで、僕は、この築瀬二子塚古墳についてなぜ玄室が赤く塗られているのか不思議に思い、赤い色について調査することにした。また、現在の群馬県は、県庁が前橋市にあり、商業都市としては、高崎市が中心と思われるが、古墳時代関東地方の中でなぜ、安中の地に最も早い時期に横穴式石室が取り入れられたのか疑問に思ったことから、上記2点について調査することとした。

2.調査方法と調査内容

(1) 調査方法

(ア) 東国文化副読本

東国文化読本を読み、調査する築瀬二子塚古墳について調べる。

(イ) 築瀬二子塚古墳ガイドンス棟

実際に訪れて、築瀬二子塚古墳の情報収集をする。

(ウ) 築瀬二子塚古墳

実際に訪れて横穴式石室を確認する。

(エ) 安中市学習の森ふるさと学習館

築瀬二子塚古墳の当時の模型や出土品を見学し、安中市の歴史について調べる。

(オ) 検索

調べきれなかったところや分からなかったところなどをインターネットで調べる。

(カ) レポート作成

得た情報や写真を整理してレポートを作成する。

(2) 調査内容

(ア) 赤く塗られた玄室にはどんな意味があるのか?

(イ) なぜ、この築瀬二子塚古墳が関東で最も古い時期に作られた横穴式石室だったのか?

3.調査結果と考察

(1) 赤い玄室について

(ア) 赤い原料

まず、玄室に塗られた赤色が何から出来ているのかを調べた。「東国文化副読本」によると「ベンガラ」という顔料が塗られているということだ。この「ベンガラ」のもととなる「赤玉」が、群馬県渋川市にある「金井東裏遺跡」で120個以上発見されている。「赤玉」は直径5.5～8cmで重さは350～450gほどだそうだ。ちょうどテニスボールぐらいの大きさである。「赤玉」は酸化鉄を含んだ土をこねて丸めて固めたもので、生のままで焼かれていない。使用時に水で溶かし赤い顔料として使っていたそうだ。金井東裏遺跡では「赤玉」は雨によりぬれることのない建物内に保管されていたことがわかっている。



【発見時の赤玉の状態】



【赤玉】

僕は「赤玉」が玄室に使われたのではないかと思った。そこで、群馬県埋蔵文化財調査センターの方に聞くと、蛍光X線分析をしたところ金井東裏遺跡で発見した赤玉と築瀬二子塚古墳の玄室の赤の顔料は同じ元素が入っていたということが分かったそうだ。

つまり、築瀬二子塚古墳の赤く塗られた玄室は「赤玉」からできていることが分かったのだ。

(イ) 赤色の意味

なぜ、そこまでして赤い顔料を使ったのか?と僕は思ったのだ。そこで「赤色」には昔どんな意味があったのか、まず、自分で考えることにした。赤色と言われて思い浮かぶことは、古墳時代では、「赤い顔をした盾持人埴輪」や「赤色のとさかを持った鶏の埴輪」だ。調査してみると、赤い顔をした盾持人埴輪には魔除けといった意味があるとのことだ。

また、鶏は、夜明けに「コケコッコー」と鳴く習性から暗いあの世（夜）から、明るいこの世を（朝）を行き来するとされ、太陽（魂）を再生させる力、つまり死から蘇らせる力を持つ鳥とされていたそうだ。

さらに、現代で赤い色で思い出すものは神社の「鳥居」である。鳥居の起源には諸説あるようだが、「鳥」が「神の世界と人間の世界の境目にいる存在」という考えを具象化したものが「鳥居」という説もあるそうだ。

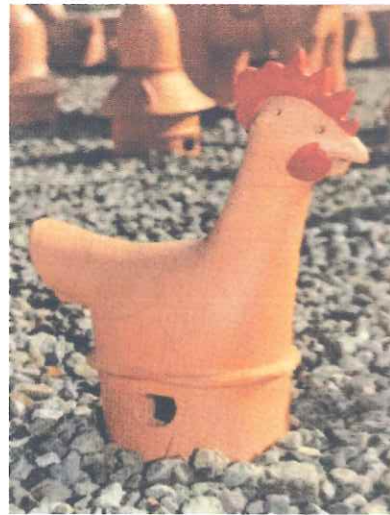
また、稻荷神社の鳥居の赤色は稲作に必要とされる陽の色として、魔力や災厄を防ぐ色としても考えられているそうだ。

やはり「東国文化副読本」に記載されているとおり赤色には神聖という意味や再生・魔除けといった意味があるようだ。

また、群馬県内では大室古墳群の前二子古墳に、県外では栃木県壬生町の車塚古墳、岐阜県揖斐郡南高野古墳にも赤く塗られた玄室がある。



【保渡田八幡塚古墳の盾持ち人埴輪】



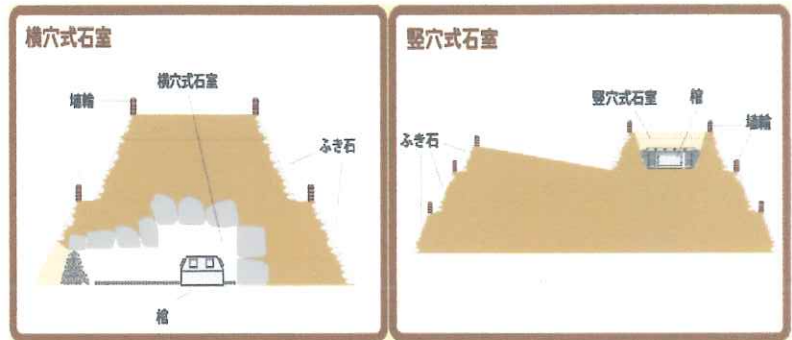
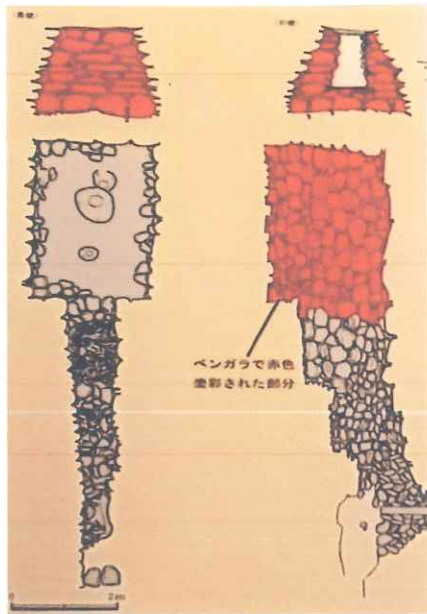
【保渡田八幡塚古墳の鳥形埴輪】

(2) 関東で最も古い時期に作られた横穴式石室について

(ア) 横穴式石室とは？

竪穴式石室の方が横穴式石室よりも早い時代に普及している。竪穴式石室は墳丘の上部にあり大きな石などで蓋をしてしまえばその後開けることは不可能となる。しかし、横穴式石室は墳丘の下部に石室があり、そこから外方面へ続く羨道があり、戸のように土や石で閉じた部分を崩せば出入りが可能である。

【築瀬二子塚古墳の
横穴式石室見取図】



【竪穴式・横穴式石室の比較図】

(イ) 横穴式石室はどうやって伝わってきたのか？

下の図は古代の道「東山道」である。5世紀初め頃までに朝鮮半島から日本に伝わった「馬文化」は5世紀後半には「東山道」によって群馬県にも伝わった。馬は、軍事・輸送・農耕などの手段としてとても貴重であり、その普及とともに陸上交通が重視され、山や川を超えて行く「陸の道」が整備されていったのであるという。それが「東山道」である。東山道は畿内から現在の中部地方を通り長野県内を抜け、軽井沢町から入山峠を越えて群馬県安中市を通り群馬県内を抜けて東北方面や埼玉方面へつながっているようだ。畿内からみると群馬県は、東国、そして、広大な関東平野の入り口にあたる交通の要地であり、このことから群馬県には先導的な技術や文化がいち早く伝えられた。そして、群馬県内でいち早く先導的な技術や文化を伝えられたのは長野を越えた先の安中市であったのである。

5世紀に朝鮮半島から伝わった横穴式石室は、初めは畿内や北九州で作られたのち、東山道を通してこの築瀬二子塚古墳には他の関東地域よりも50年も早く伝わったのである。

【東山道】



4.感想と今後の課題

築瀬二子塚古墳の見学に行ったとき、見学の目的「赤く塗られた玄室」が見られなくて残念だった。なぜ見られなかったかと言うと、石室の入り口に窓のついたしまった扉があり、入れないようになっているからだ。その扉の窓から覗いてみると、長い羨道があり玄室がライトアップされるも、赤く塗られた玄室の様子はよく分からなかった。またすぐ近くにあるガイダンス棟では、普段3D映像で石室の様子をみることができそうだが、コロナ対策で見られなかったというのも残念だった。せっかく関東で最も古い時期に作られた横穴式石室なのだから、なんとかして実物の石室を見られるようにすればアピールにもなるし、よりもっと石室に関心を深められると思った。

また、今回赤色について調べて思ったことがある。それは、今まで僕は特別な意識をしていなかった赤色であるが、古墳時代の人々にとっては「人間や動物の血の色」や「日常生活に欠かせない火の色」であり、現代人よりも身近にある色で、重要な色であったのではないかと思った。だからこそ、魔除けに用いられたり、再生を祈り神聖なものとして大切に扱われてきたのだと思った。

群馬県の中の中心地といえば県庁である前橋市や僕がよく遊びに行く高崎市そして我が伊勢崎市だと認識していたが、古墳時代の群馬県では安中市が関東・東北で一番はじめに最新の物や技術に触れていたということに驚いた。そして、発展の基となった東山道のおかげで群馬県は畿内の文化や最新の技術も取り入れ更に発展をしていった場所であることを知ることができたのもこの研究を進めてきた成果だ。



↑ 【築瀬二子塚古墳に訪れた時の写真】



【石室を窓から覗いた写真】

参考文献

安中市学習の森ふるさと学習館 学芸員の方へ電話聴取

群馬県埋蔵文化財調査センター スギヤマさんへ電話聴取

東国文化副読本 2019年版

群馬県立博物館 第99回企画展 「集まれ!ぐんまのはにわたち
～日本一の埴輪県～」 Q&A 古墳時代におけるトリの立ち位置

かみつけの里博物館 パンフレット

朝日デジタル 日高敏景 <https://www.asahi.com/article>

最終更新日 2018年 6月28日 3:00

群馬県埋蔵文化財調査センター金井東裏遺跡に関する報道提供資料
(赤玉) <https://www.pref.gunma.jp>

最終更新日 2014年 1月9日

群馬県埋蔵文化財調査事業団
(赤玉について) 埋蔵群馬 No.64

<https://www.gunmaibun.org/>

こどもQ&A 世界遺産 百舌鳥・古市古墳群

<https://www.mozu-furuichi.jp>

最終更新日 不明